新局玉石童子訓

巻十五

1279
30

1279
30

村田

新局玉石童子訓 巻之十五

東都 曲亭主人口授編次

第四十五回

意見を示して侠者先途を擬せ
前愆を箴て頭陀得度を許せ

登時石見伏好純ハ九四郎ヲ打向ひて晤譚いまゞ央ヲ至らぎ。年十六七
なる両箇の少女。俗ヲ腰下婢と欷吸嗅做せ者。銚子酒盃をもて生ぎり。次ヲ
拶殻。又其次ヲ美麗炙魚なんど種々の酒菜を。九四郎并ヲ杜四郎楽六等
ヲ薦めまくも主客の口誼稍訖りて酒盃一巡りヲ届る時。石見伏好ハ曰。鄙宍
ヲ端ヲうち紛まて。言後れひひ思ひみるゝ種々の土産を投恵せれ。
欷ひ是ヲ優せ者ヲ。千謝萬謝も猶足らぎ。然るを僅ヲ一献の饗ハ
心ゆぎ。知らゞ如く當國ハ野味あれども海鮮ヲ。只是湖水の鯛鱠瀬

田蜆の羹のこの他若狭の塩小鯛鰒或は小鰻鰻鱺の如き魚肉ゆ富る浪華人ゆ野人の献芹ゆるんう。況是等の婢女をもて酌ゆさへ付うまゆい兵士の交りゆ似けうとも思はんゆるれども這里ゆ出居の間ゆて武骨ゆる若嘗を用るゆ宜うゆも這折をもて拙莉もいでゆ目ゆ掛らまく欲を無礼を許しゆうとのゆを九四郎ゆあくゆ。そは亦痛却仕りゆ昔ゆ昔今ゆ者も。俺身住吉の町人ゆるゆ猶同輩の弐を以分ゆ過ぎる面歟待ゆ一期の栄とゆいまくのこ倘杜四郎等ゆ要事ありて。追ふて這地ゆ迫らぬゆ拜見ゆるとかべきゆ。離合時ゆり千里も合璧幸甚しくゆとゆべ四郎楽六も共ゆゆ。当所ゆ杖を駐めゆ日より。親族ゆも優を主翁の深切物不自由ゆるゆ。ゆる旅宿のあるべしゆとゆを石見ゆ推禁めて否とゆ。和君等ゆ主君ゆ先師九四郎の恩を報んとゆ況俺身ゆりゆ時ゆ漏ゆ師説ゆ為ゆ両才子ゆ一字の師ゆ非如一年三不月宿ゆれば恩ゆ嘯べうもゆゆ。とゆを九四郎感嘆して現下向ゆ恥ぎる者ゆ其学ゆ至ざる所ゆ主翁ゆ君子の人ゆる哉就て謝ゆ奉る曩ゆ泉少年の試撃の折四郎楽六等も其員外ゆ召ゆせられて武芸御覧の幸のこゆ。牽出物賜りゆ剰御家臣ゆ列ゆ。守の御意ゆありけるゆ他等ゆ武者修行の故をもて推辭まゆりゆとゆ。既ゆ仕を辭ひゆゆ。逗留茲ゆ久ゆ云云の故ゆりとも。罪ゆがまゆ。ゆゆ為ゆゆ。ゆゆ宜ゆ計ひゆゆゆ。と憑めば石見ゆ点頭て然ゆり。両才子ゆ始より。去向をゆもがざるゆゆゆ。彼刀子の故をもて意外ゆ俺留せきゆり。今ゆ盗児盆九郎の一件果るを俟るのを。遠ゆゆゆて吉左右ゆらん。ゆの弐ゆゆ休るべゆ。とゆ間ゆ奥の方ゆる。襖戸を推開ゆて石見

人の妻出て來つ。良人の後方ふ坐を占るを。石見炒見久りて九四郎ふ告ていふゆう。十三屋主。ちろ拙荊長江と一面を願ふのこと。ふふ九四郎遠〳〵。形を改め額衝向へて寒暖を舒無異を祝し。且杜四郎等の止宿のゆ。今ハ亦美酒佳穀の饗應の歡びを云云と演しゝ長江ハやを〳〵膝を找めて。額衝受て且りふゆう。昔のゆハ知らぞ付ぞ。良人の話説ふ豫ぬく。両柱の刀祢達ふ。訪れまりし甲斐もなく。只宿まゆるのをゆるふ浅〳〵ぞ。ぬえのふハ心裡恥く付るゆる。浪華ハ百里の遠ふあゝねど。送ふ手來疎〳〵し。ち人身さえ好風吹ていや一帯ふ見参ハいるゝ賓さ称るゆる。田舎料理を嫌まどいちよゆる幸ふ付るか〳〵。いつで過さぬくと。て盃を薦め穀を裝添て歎待叮寧ゆりけまゞ。九四郎杜四郎栄六ゆ憂謝して且うち譚ふ程ふ長江のりふゆう。ぬくふ浪華の哥々さふ九四郎ハ。

辨財天信仰ゆて。折々安藝の嚴嶋へ詣ぞ。ふふゆゆ。愚息高嶋硯吉郎玄純ハ尚総角ゆて付れども。遊学の為周防ゆる所親許遣して去歳より山口鶴峯の城内ふ付るゆる。嚴嶋詣の折ゆぞふ彼地を過りゆふ日もゆ〳〵。いつで訪ゆれゆ。然らば這地の無異もぬえてさゆる歡ひ付るべ〳〵。とゆふを九四郎うちぬて。開るゆゆる巳安藝嚴嶋へ詣しハ只一度のこ。明年も亦参ゆやと思ゆぎるふゆ〳〵ねども。まゝくハ是水路ふて周防を過りいつぞゆれども便宜の折もゆ〳〵必拜見仕らゞとゆふ石見炒も笑ーげふ。開ハ辱くハ拙郎ハ素是駑才ゆて大江峯張の両才子ふ及ぶべくもいつねど。萬ふ一和殿ふ訪れて教諭を受る日もゆ〳〵必神益まるべ〳〵。とゆふ間ふ入相の鐘鎬々と鳴ぇ〳〵。九四郎ハ盃を辭ひてかく〳〵去まくも。然れども石見炒いまゞ許さぞ先夕饌を薦んとて又碗飯の歡待あり。四郎栄六も相客ふゝ。

飽て十二分のゝ[illegible]。是より先に伴當四人に客房を酒飯の欵待あり。
老僕某甲盃を薦めて醉を盡しゝ。既にして九四郎に主人夫婦に別れを告
て立去らんとする時石見守に豫准備の藥籠三箇許折敷に載せ今
生て先其一箇を九四郎に贈りて曰の如く十三屋主這仙丹は前夜既に知ら
れし如く我家相傳の神藥なり。金瘡に即效あり。只死を起すのみ。幻
術ある敵と戰ふ時是を一匙口に含て吹て其敵の面を打べ眼眩をなし脚癱て
其妖術行まじ。立地に伏誅せべし。或は又老妖変化の者其隱頭無邊無
量にして弓箭刀劍を以て制しがたしるも這仙丹を酒に雜へて薦めてよく
醉たれば其妖敗まじとの者なり。昔唐山胡元の時。胡人妖術をなす人に
禍害をなす者多し。猫鬼の類即是なる時に濟世道人と喚做す。一箇の神
仙這仙丹を患者に施して妖邪を對治せしとなり。其已に勝利ある者彼

蛍火鎚柄九に百倍を當時我遠祖に冠守るつゝふあり。一稔商舶に俱せ
られて元國に到り一日。彼神仙に邂逅して這藥方を受しより。歸朝の後
子孫に傳へて家の秘方とせ是より以降家督たる者一世に一度是を
煉り其製藥容易ならざる齋をする者一百日火を改めて別室にあり。朝夕
妄想を駈除きて天地に祈りて是を成せり。縱親族たりとのふとも深信
なる者にあり是を與へざる又心術行狀正しからざる者にあり秘して
いはざれば人是を知る者稀なり。遮莫和殿等三賢才は我先師の骨肉なり。
世の豪傑と覺るに這折を以て分與へべし。非除仙丹ありとのふとも又何
人の為に藏ん。大江峯張兩才子は異日袂を分つ折贈らまく思ひかなる。
よに折られべ進らせる這義をいろいろ又兩箇の藥籠を合
て杜四郎と米六に遞與せば各受戴紀飲び面に見れば。開ぶ中に九四郎に

石見必ず謝して、ゆくゆく如何に這仙丹が病苦を救ふのみならず是軍陣に大益あり。九四郎ゑんどう身単に藏めて秘薬に做さんより、治比の大人に晋上せば、躬方の為に大利あるべし。最赤くいと恐へて懷に入れば杜四郎笑六も共に心ゆう。今に忘れぬ主翁の恩貺今日の園生に干るそら。沿ゝる べき欣びなるに、世に未曾有の仙丹に價千金萬金なる哉目今報ひ難きに物なきを憾とす。年歴て安藝へ還るの日賢息硯吉郎猶周防に留まらば必那里に立よりて一臂の労に代るべし。情願はの外に忝とのみ石見も妻長江も。俱に本意ある面色ゆて又茶を薦めもてなすを。九四郎は謝して受ず主人夫婦に向ひて在下は大後日の比正に立去らまく欲を重ねて見参つかるべし。失敬宥恕を願まつる。とのひ果て多を起せば杜四郎と笑六とは燭を秉て後先に立て玄関まで送る程に石見は客房に出て袂

を分ちけり。當下四摠は挑燈を老僕に借りて外面に在り。今九四郎の出るを見て先に立つて城門を出るに夜丈なれども石見は豫番士に告さるに。障りもなくて共侶に當晩麦中の比及に津向屋に入り來て主僕枕に就ぬ。其次の日に杜四郎は笑六と俱に治比の親胞兄弟に進らせべき書翰を相整て共に津向屋に赴て九四郎に對面ある。其書を渡して云云と昨日の餘談に及ぶ程に九四郎が云ふ。高嶋主の深切に就て我亦思惟に。辛踏の鬼妻阿夏の老母は我妻乙藝の継母ゆて五稔養育の恩あるに。然るを他に幸なくて良人に後れ剰蝶蛉女を亡ひ、これ程よるべもなくら。ぞ做まるるべし。前夜既に一度復しくする彼金一百九十五両は落葉の刀自の要金なれども。和君達ゆも知られし如く。其内中百両は我笑六の為に償ふて落葉の刀自に返しくする。其返金五十両は木玄和

尚ふ借用ありて。又五十両は我九四郎が治比の大人より賜りくる恩禄のれば我物と通て二百両なるを。五両は當初朱之介が路費ふ使ひ亡ひしと欲しべ我金なるべ紀は四十五両のみ。今又是ふ五両増て其五十両をもて。阿夏の老芦ふ贈りるべ彼身の一生涯を養ふまでふありやせ。是則ち藝の為ふ。報恩の一芸なり。残る一百五十両は百両を落葉の刀自へ。五十両を木去和尚ふ。返さ時は損金なり。世ふ大丈夫なる者は一飯の恵ふも必報ひ睚眦の怨も必報ふ。我ふの心は乙藝の本意ゆえ。乙藝の心は落葉の刀自の慈善ふも稱ふべし。這芸誰何と談れば杜四郎と楽六ら。聴て俱ふ感じて已まず。ふるべ〜と応しるべ又九四郎のいはく。是等の事ふ證人なくは後の為ふ宜〜ふ楽六ゆべ〜そ准備の金子を懐ふ。旅中力を腰ふ跨て。俱して彼宿所ふ赴紀しるべ。迯ふ杜四郎と四摠のみ或は故郷の光景を尋問ひ或は當城内ふ

あり〜。衆少年の試撃の為体をらひる生ぜ。思ひ出る時を移さ程ふ。九四郎は楽六を将て隣なる老芦の宿所より。ひとし〜くかへり來ふければ杜四郎は席を譲りて那里の首尾を諮問ふ九四郎ぞ。ひとし。已老芦ふ面談して。意衷を示して齎しる。五十金を贈りしるべ阿夏の老芦は膳を潰して。云云と辭ひしを我亦理りを述。言を盡して屢諭して已ざりけるふ彼小忠二と阿鍵とあんもらはる日の隨那里ふ在り。我ふよりをうちぬく。感嘆の聲を沿断さぞ。俱ふ老芦を諭してらはる。九四郎主は仁義の人と。恐ふ報ふふ徳をもてきとゆえは是等のゆるべ。然るを推辭むとらはれて老芦は感涙を拭ひも果ぞ件の金を受戴ひつゝ泣けり。登時又小忠二は。老芦ふ代りて金子受納のみ実一通を書写して加印して。咱ふ呈覧を阿鍵も俱ふ老芦の為ふ欲びを陳しるべ我又老芦はうち向ひて。らはるべ

るゝ。喪ひ易し。錢財。和女郎今より其五十金をのて口を餬ふ足らざして。饑渴ふ及ぶるもわるべ。住吉まれ大和まれ。乙藝を尋ねて來ぬれ。和女郎の前夫なる。木偶丈夫乙藝の父。其後和女郎ハ夫を重ね。繼母なれども乙藝の爲ハ親とゆ字ハ削られぬ。落葉の刀自もあるべ。本性慈善の人なれば。何でゝ同居を厭ふべし。必ず意趣のひそと慰めの別まを告げゝ。開が儘ゝ來つると告れば。示米六も。阿夏の老母が辭ひゝて。困じゝ。為体を。説示して。示ゝ。憶ふハ彼小忠二ハ老母の資助ふ成る者なゝん。性老実ハ見色めれば。彼身ハ是より安るべ。とゝふ四郎も四摠さへ世ハ示る〻ゝ。九四郎の義侠をゝゝく感じける。姑且して九四郎ハ杜四郎等ふうち向ひて。已這地の所要ハ果ぬ。明日ハ夙めて立去りて。住吉の宿所へ還らまく欲も願ふ。和子等。一日も早く。他郷へ去りて。修行為へ。旅宿ふ手を累るとも。三稔ふ

一番ゝり來て。親胞兄弟の安否を訪ふ。人の子ゝる方ゝもや。克身を愛して。病尼を。防ざれば事成らず。又只無異を祈るのミ。ふ和子の上のミゝ。ゝ。ゝ。米六もゝく思ふべ。とゝふ四郎も米六も。一義ふ及ぶ受訪ひゝ。開ハ示火急の別まふ做りぬ。今宵ハ茲ふ止宿して。明日ハ夙めて路程三里ゝりとも送るべ。とゝふを九四郎等ゝ。その示要ゝ。和君達も旅客ゝ。送迎ハ折ふるべ。古語ふゝ送君千里須一別假令幾里送るとも。別まハ心ゝ。這里ゆ。袂を分えのミ。とゝふ間ふ客店主人津問屋集三ハ。親銚子酒盃をゝて。生く。九四郎等ふ薦めゝゝ。夜隣家の変ゝ來。各位の人ふ異ゝる。御氣質さへ推量られて感心の外ハ。然るを示程もゝく。今宵涯のゝん宿と兼りいふ殿原さへ來ぬ。心ざりの村酒一酌御歸路を祝ゝ。まゝる而已。とゝふ。ゝ盃を薦る程ふ炊

このたびの本文い
第十三丁ふかえす

如幻如泡尼
草庵同居の
登古呂

妾ぐりて來ぬる。酒菜い枯る乾羊魚も。心い清紀蓮根の糸のまわ引く糸鰯。結乾瓢炙鶏卵。拇茄子の塩漬も。現一口ゆいらひて死人の誠ふ九四郎いよ〳〵折〳〵と飲びて四摠も倶ふ呼集合四郎柒六甲ひとゐく。茲ふ僅ふ送別の盃を果を程ふ冬くの日ゐれば短くて下晡ふゐりーゐべ。九四郎い杜四郎等をいとゞ〜立て且いのふゐゐ。和子達をゆくかゝり去りて。高嶋主へ昨日の謝礼を宜〜〜言伝のひてよ。柒六い我為ふ昨夜借よる高嶋の挑燈をりてゆゐて老僕ふ謝して返せゐ。暮果ゐべ城内へ出入容易るべゐゐぞ。疾還らぞや。と促せば杜四郎も柒六も告別さへ言語意迫治比の一戈いべさゐゐ藝刀自ふ。木玄師父ふも宜く言伝のひねと。いひ果て身を起を時四摠ゆをゐ〜差ぞ。彼挑燈を柒ゆ受合りつ引提て杜四郎ふ倶ゐて出ぞゆを九四郎并ふ四摠さへ客店主人集三日。店前ふ

る馬繋柱の遠ふ立て目送りけり。然ゐべ十三屋九四郎い其詰朝四摠を倶て。早旦ふ津向屋を立去りつ。家路を投てのとぞ。老苧小忠二絡いらまで知らぞ。是日未の左側ふ阿夏の老苧い九四郎ふ昨日の恩恵を謝せんとて果子一折樫と佳茶一嚢を齎ゐ〜〜。庭門伺ふ津向屋ふ赴紀て九四郎を尋ゐふ宿の女房出迎へて。彼客人い今朝昼ふ立去りのひねと告げゐらべ老苧い望を失ひて。悔〜〜思べど今さゐふせん術もゐ紀りのゐゐ。然ゐも浮薄の本性ゐれべ。毫も脱落らぬ面色ふて。否。彼人ふい然せる要ゐ。集三主ふ最痛ひとらんい恥ゐ〜けれどゐゐ。受恵のゐ紀心配りねとらひゐ件の果子と茶を渡せば女房苦笑へて。ゆゐ恵ひゐもゐ紀心配りふ預り付り。鄙語ふゐふ。餘り物ふい。福ことわゐふ。と受戴けば老苧い他さへ歎難て。暗ゐられけりと思ふのゐ。是将ゐ〜悔〜紀を。然氣も見せぞ宿所ふ帰

りて小忠二阿鍵ゐ云云と告るべ小忠二眉を顰めて默然ぐるゐ半晌許只
九四郎の立去りを。知らねば告別もせで遺憾とぞ呟けゐ。九四郎四搜ゐるゐ。
その下ゐ話ゐ。然る程ゐ觀音寺の城内ゐ市井の頭り一口鬼太夫安倍
い盜見盃九郎のゐゐ就て。拘杞村の村長故老并ゐ三池邨ゐ宿六ゐを召
よせて。他が素生を質問ゐゐ原是盃九郎い拘杞村の孜社客留守七の獨子
ゐて二親身故りゝ後放蕩無賴做ざるとゐく。近曾借財の爲ゐ相伴の田
圃いさゝ居宅も人ゐ沽却して。竟ゐ無宿ゐ做りゝゐ。その故ゐ小父宿六ゐ最西
教訓の詞を盡ゝ時々折檻の眷を抗ることゐ。盃九郎毫も怕ることゐ反て
窮鼠猫を咬の勢あれば宿六ゐ得勘當して寄着いるとゐけり。ゐ後一口鬼太
夫い日毎ゐ盃九郎を獄舍より牽出させて其積惡を責問ゐゐ。盃九郎い當初
大江杜四郎の刀子を偷盜り。其後末朱之丞と共倡ゐ。吾足齋の宿所ゐ潛入り

て彼家の蝦蟇女晩稻を搔攫て出去る折。吾足齋ゐ撞見して彼身ゐ深
疵を負せゝより。竟ゐ死ゐ至りゝ。ゐ或い人の妻妾を誘ゝ或ゐ
人の小孃を勾引して人肉經紀ゐ賣渡ゐゝ。招了
既ゐ分明あれば鬼太夫則高賴主ゐ呼えて上て次の日盃九郎を申明亭へ牽
出させて。死刑ゐ行ひけり。是日鬼太夫い拘杞村の長并ゐ宿六及吾足齋の
鬼妻老婆并ゐ津河屋集三里正故老等を召よせて宣示さらく。盜見盃
九郎のゐ云云の積惡あれば既ゐ死刑ゐ處せられゝ。皆這旨を存ぜべゝ。
但ゝ同惡の罪人末朱之丞い今ゐ往方知れずとゐく。吾足齋身故りゝれ
べ里正故老等ゐ代りて他を見ゝ。捕捕て將て參るべゝ。等閑ゐ思せそと
捉らる。是日又鬼太夫い當藩の兵頭高嶋石見守の老僕某甲を召よせて。
宣示せゐ前の如く。且ゐ盃九郎の罪定りて既ゐ死刑ゐ行ふゝ上い。

其許は止宿の旅客大江杜四郎峯張楽六郎等なり。又問ふべきもの。今よりの後行も止む。彼人々の隨意あるべし。這度を主人は偽くよと捉て支皆落許さけり。是より幾ふ二三日を歴て。阿建小忠二の隠田のもの。他等が稟品證据ありて。守の疑を解ふ足るとて。帰村のものを命ぜらる。其故へ。件の隠田へ素より阿建の化粧料ゆて大夫次の遺田なるぞ。まくをりて暴ふ彼家滅亡のをり。籍立を免れて。没官せられざりし。是等の公事も鬼大夫奉りて着落の日。阿建小忠二福富の村長等を召よせて宣示を所なり。然るべきとあれ。阿建小忠二は始て怡悦の眉を開て。福富村へかへり去らまくるふ阿夏の老芋が身単ゆて。所寓なるを憐て。將てやんとらふより。老芋い借地を。集三ふ返して。諸家伙家作夜物などの不用なるを售て。十八九金を得たり。鄭ふ九四郎の贈りしる。五十金と共ふ。七十金ばかりの貯様あれべらんで是をも。

社涯の計を做さんやと。其内中六十金を。小忠二ふ預けて。福富村へ伴なる。是より。阿夏の老芋は彼酒肆ふ歌りて居り。猎名の為ふ朝夕の薪炊の資助ふ做さるのを。今年も既ふ尾ふ入りて。一日雪の降ける嘘氏日ふ年歳六十なりある一箇の行僧福富の店前ふ立在て念佛して一宿を乞けり。阿建は昔年良人太夫五郎なりしより。其日を則命日として。香華を賄ふ。ご志ふ。今日も其日ふ値りしふ。躰て件の行僧を喚入れて。脚を濯せるご志ふ。躰て納戸ふ案内して火桶を與へ茶を薦るふ行僧は右遍ふ。家猫を見ふて且廻向なる程ふ猎名老芋は遠く茶粥を煮て薦めけり。當下件の行僧は阿建老芋とつらつらと見ふく頻ふ嗟嘆して其過去を談ずるの素より相識者の如く。死蒙を指ふ似て。目其法名を詔るふ行僧答て我名は幻泡と唤做しより。年來大和の六田川ふ在り。如如

來禪師に從事して、不二法門の妙要を汲れば、行脚して這地に到まり。和
孃生來落命されども、然しも佛緣ありしに至りぬる故に火宅の
煩惱を免れず。我今不可思議の法語あり。俱に聽聞せよ。人の世の果敢
なき無常迅速の機を說易く、悟りぬる者を說諦し。菩提正覺の人安くし
ぬる。其上昔を和解し示さに其言婦幼にも通ぜずとぞいふ者なれば阿鍵へさて
阿夏の老尼に年來の凡慮俗情を立地に洗除れて深信膽に銘ぜしめば俱
に十念を受しより、女僧に做らまく思ひ起して隨即這我を希ふに阿鍵も同
意なり。先夫五の生死存亡を問へ知らまく欲するに幻泡法師頭を掉て天機
に毫も漏さぬ後に知るべし。あゝ其良人亡命して十年を經て還
らざる其妻尼に做るとても、孰欲是を疎忽せん。剃髮のるに饒をべし。後の離
合に示しぬ。とのふに老尼も朱之次の後の禍福を問難て俱に得度を願し

べ幻泡法師點頭て今宵に既に更闌に明日剃髮をべとて儲の卧單に
案内を請て就て枕に就けり。かくて其詰朝小忠二措名に阿鍵老尼の
剃髮の儀を知りて俱に肚裏に思ふに阿夏の老尼に左まれ右まれ我力
自阿鍵に郎君子禁五の存亡に安定るべきに剃髮に早うせとのふに
らるれぬ時誼るれば渡外に措て疑べを先客僧に齋を果して阿鍵老尼の
しも剃刀盥の准備をまるる程に件の兩箇の婦人等に俱に衣裳を整へて。
家庵の下に居り當下幻泡法師に綱編の袈に藏めて。袈裟法衣を出して被て。
先佛檀に本尊佛を戴足膜拜き畢りて阿鍵老尼に髻を解披せて各其
雲鬢を八箇に結て為に經を讀て偈を唱へ剃刀を含て抗て剃て圓頂の優婆
姨に做らば則阿鍵の法名を如幻と命け。阿夏の老尼の法名を如泡と命け。隨
即十念を相授て度帳を寫して取れば阿鍵老尼に額衝て導師を礼

拜奉りける當下幻泡法師諭して道く。女人は其性嫉妬なるが故に。這故に
成佛なし難し。されども儒教にも女の嫉妬なる人は百枝を拔かしめ。佛教にも
法華經提婆品に八歲の龍女成佛のことあり。是時に方りて龍女摩尼宝
珠を以て釋尊に奉獻せ。這個宝珠は則龍女の神魂。釋尊是を受ぬる
時は龍女の成佛知るべしのみ。非如女人の僻る心を佛に做さば做して。只其工
夫の至らざるに昔當麻の中乗尼平將門の女如藏の如き女人成佛の徵を做べし。
汝等今より佛經を讀習ひて其經文を解し。沒ぬるまで許麦の歲月を積ざれ
ば。只日毎に佛名を十萬遍相唱て且其間に涅槃經四句の偈を唱誦
して。俱に成佛を樂ふべし。浮世は諸行無常。佛は寂滅を樂とす。人各命終
る時の經營に違ひ。是悪を做さんが所なり。是則寂滅為樂と。然れども心
靜ならざれば漫に外物に誘引れて。一大事を忘るゝに至れり。故に佛門の

徒を名づけて禪定門といふ。禪は靜なり。定も靜なり。汝等靜坐默識して禪
定たらん時。年五十に至りて。俱に諸國を行脚して靈山灵地に詣る毎
に佛を拜して懺悔せば。良人の存亡を知る時あり。其子の禍福を悟る日もあ
らん。努力懈るべからずとの。教化叮嚀なりければ。如幻如泡の欲びいさむ側なる
小忠二指名心の尼小厮丁太郎も。渴仰隨喜せざるいなく。坐に涙をうつかを
けり。教化既に果しぬべ。幻泡法師は袈裟法衣を故の如く袋に藏めて。
告別して去らんとするを。如幻如泡は推禁めて。准備の布施二包を。盆に
載て。辱れば幻泡退けて敢受ぜず。且いふ。捨は只是有漏の緣。出家は乞
食して世を渡る者。金銀錢財は出家人に大毒物なり。布施は昨宵の宿
の足を洗ひ。暇乞して身を起して草鞋穿締め笈を背に。笠を戴き錫
杖を衝鳴して。雪の細道物とも。せで往方も知らぬ。出でぬ。其後本村の

長某甲が阿闍老芦の剃髪を受け知りてそを訪んとて来れる折幻泡法師のあるを聞いて駭嘆して且のたまう。ある日人の尊ぶ所近曽彼大和なる六田川の如如来禅師い這近江路に行脚ありしが光りを包み名を埋めて凡夫に知らせざるぞ。但仏縁ある家にのみ一宿を乞ぬとのり。恐らく其幻泡法師い如如来禅師にあらずや。とうかに如幻如泡いさゝか小忠二措名もちて暫く始て悟る値遇の縁倶に深信弥増けり。然が今茲い果敢なく暮て其次の春二三月の時候阿闍の如幻い忠二に商量ありて本宅の背門の方に宜き地を撰び其里に草の庵を締びて如泡と同居の室とし定めて酒肆い名残なく小忠二夫婦に取せけり。この折又老芦の如泡い郷に小忠二に預けて彼六十金をもて良田良園を購求めて年毎の衣食の料とす猶且如幻い陋田あれば倶に乞食に及ぶ。只旦暮に香を焼き花を折て仏に仕るの外他事なく如

幻い黄金の上を掛念せざる。如泡い朱之丞のなを思ひ世い例に安しといひけり。この是後の話なり。桑下某生再説。小程に大江杜四郎成勝峯張楽六郎通能い彼盗見金九郎の支果て進退自由ならずして先や這地を立去りて猶北國へ赴んとて主人夫婦に別れを告て更に起行の用意を做す程に月屬親く交参する長橋倭太郎。象船美弥。多賀志賀丞なんど。その他も同藩の少年数名欣早くこの義を聞知りて詣来て別れを惜ざるいなく或い餞別に東西を贈るもあり。四郎楽六い逆路の煩ひあれども謝して辱くい受ざりけり。所が中に曽根見五郎平宗去い近江鄭魚の一夜鮨一小桶を齎して来て杜四郎楽六に告ていはく。両才子明日い立去りなんよ。寡君既に聞召れて惜ませ給ふ。大々こゝろぞ。今い禁るとも留まるべし。物なく贈りて予が志を致せと。内々の美を以微臣を使に立られしと。一夜鮨い春夏の間に

こと七人の愛る者ありふ今冬の中氣也。時節相応しうらねども実ふ當國の名物こ是喫るべうもや。と口状特ふ爽然ふ演て件の鮭桶を渡せば杜四郎受戴ひて。お思ひ設けもうた恩既ともに面目あれ。柴六郎と共倶ふ程なく拜味仕らん。あの弐宜く出執成しをとらくば柴六は額衝ひ羨て頼まるることを答へけ。既ふして五郎平い猶留別の詞を盡して且再會を契りつ伴當を將てうり去りけり。浩處ふ石見次好純い今朝城ふ出仕の後目今退りぬとなえーらば杜四郎柴六い方僅守より賜りくる。一夜鮭のるゆを告て其鮭桶を見せけるふ石見次欣びて。开い各位を惜ませのい守の仁愛あるべけ。然れとも今日い。我先人の忌日なれば一家兒皆精進。明日其餘味を拜ましゝ。和君等い今日ふうて。明日い他御へ立去るなれば目今嘗ましの人とも急ふ若黨を呼よせて重封箴まする鮭桶の盞をうら開らせて鮭幾箇秋両箇の碟子ふ莫分ふ。

製の濁酒一壜と盃著をとり添て。他等のふ舎ふ遣しけり。杜四郎と柴六と。素より鮭を嗜ねども。然しも貴人の賜ものうふ主人の好意も默止ることなれば各其鮭一箇をたうべ濁酒も多くふ飲まぞうち相譚ふ一程俱ふ心地常ふもぞ猛可ふ胸張り腹痛して腸断離ぞうりあれば。俱ふふ堪ぞ輾轉て苦報ふべうもわうぎりけ。其聲奥へや洩えん。石見次走り來つ。這為体ふ胆を潰して連りふ人を呼立れば長江いさうこ侍姫等。老僕若黨まで走り來て藥よ水よと噪ぐのを計の生る所を知らぞ當下石見次思ふやう。這両才子の病症い必是食傷ふうん。我家の仙丹い金瘡ふのこ助效あれども。食傷も亦毒の為ふ脾胃を傷らく若あれば。其理い是一ふるべ。用ひて見ばや。と尋思をきつ。彼仙丹を水ふ解て杜四郎と柴六の口中ふ決ぞ入くふ。俱ふ四肢厥冷して九死一生と見ゆるの

利鎌を日光めゝ七巨棋
杜四郎を撃まくを
此本文八第四板
四十六回ふ出ム
後板發兒の日
合せ見るべ〜
正位稲荷大明神
杜四郎

正位稲荷大明神
正位稲荷大明神
正位稲荷大明神
ゆかり

る。藥いよ〳〵吭に降りねとぞりゐして即效あるけれど。猶幸に家に殘る
る一角を細末にして。是を日毎に用ゐる程に病人漸〳〵頃〳〵の聲消定
りて臥蓐に抱起されけり。既にして日に暮しゐど石見屋の奴隷を医師
許走らせて急に招起よせまくもるに其途近ければ早の所要に立べく
もあらぬ左右もる程に杜四郎柴六當晩丑三刻時候に其〳〵土浮〳〵く
より。死ぬぎるを泣けりけり。其詰朝彼醫師來診して這小年達の病症へ。
中寒くより生じる食傷にて藥を調進まれど杜四郎と柴六々謝して其藥
を飲まぬ且いふ。最初彼仙丹と一角微りせば已るに必死ぬん。縱即幾ぬ
ぬとも。他藥を用ゐべくぬとて猶前に綿に從ひけり。俱に思ふ〳〵あれば其
次の日石見屋に昨日の飯鮨を取出て見るに。飯の色酷く變りて。訝〳〵
涯りもあるを敢て言ゆ生ぬ。其鮨に遺もあり。なづく〳〵庭の土中に埋め

て。悄地に後の病厄を禳ひけり。然る程に同藩の少年等。及彼曹根見五
郎平まで大江峯張の大病を密知りて。日毎に訪來て云云と安危を知らまく
せ〳〵も。倒に厭煩るべ。這病厄に年暮て明るべ享禄四年に成りぬ。這
春正月の季に至りて杜四郎柴六。俱に大病癒り果て氣力本復をそげれ
べ主人夫婦に再生の恩を謝〳〵別を告て立去らまく欲せるに石見屋の
いふやう。和君等大病の後幾程もなく。餘寒を犯して遠く走らば身を愛せざ
者に似たり。先一両日近郊に杖を曳て歩固を整ふ後に障なくば其折に起
行ぬるも遲ぬにあらじ〳〵と。〳〵の理りなれば杜四郎柴六は漫行をなる程
に又料らざる小厄あり。その故に杜四郎は肩に浅痍を負ふに至れる。其事の
光景は綉像を前に生ものを又巻を更て且下回に解分るを聽ん〳〵。

新局玉石童子訓巻之十五終

○玉石童子訓第三板自四十一回至四十五回画工代稿筆工目次

繍像畫工　一陽齋後豊國（一陽齋）

代稿　澤正次

淨書筆耕　十一十二之巻　谷金川
十三十四十五之巻　舩喜知

開巻驚奇俠客傳第五集　上帙五冊　下帙五冊　近刻

新局玉石童子訓第四板　第自四十六回至五十回　五巻　推續紀　嗣板

本編第一板二板三十一回より四十回に至るまで皆分巻の趣なりて巻の一の上巻之一の下と称されしを四十一回より下ちのづゝら巻を做して分巻と做さぬようにしたるぞこてなりて五の下より以後の冊を唱へども第四十一回に至りて巻之十六の十二十三をもよりて下の巻皆是に做ふべし又筆耕細密なる時は看官披閲に便り宜しからざるをもて憂ふ者あれば書肆亦作者にこふて筆耕を後くしされども他編にくらべれば一行猶字数多く又作者の本意ならねども容易便利に従ふ所已にこれをゆるされよりて整言して猶此の編の年々に續ぐるされんことを惟祈るのみ
書肆文溪堂敬白

○家傳神女湯　婦人ちのみち諸病のめぐく　一包代百銅

○精製奇應丸　大包代金二朱　中包代壱匁五分　小包代五分　ちゝとうりに付

○熊膽黒丸子　くすりのなる汁を以丸せ　あるくのりをまぜ　一包代五分

○婦人つぎ虫の妙薬　つぎ虫ハきうきんでおりものとぼとおるふ用ひてけうくるのうちぬき　一包代六十四銅

製薬本家　四谷　隠士　瀧澤氏
弘所　元飯田町中坂下南側四方みそ店向た紀澤氏

代稿作者　澤清右衛門

弘化三年丙午春正月吉日發行

大坂書肆
心齋橋筋博勞町角　河内屋茂兵衛
心齋橋筋北久宝寺町　河内屋源七

江戸書肆
大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛板